子育て支援
最前線

子育ての村「むぎのこ」北川聡子園長に聞く

向き合って、寄り添って、37年

これからの子ども・子育てに必要な支援と心理の役割

1983年、大学を卒業したばかりの同志4人が札幌で始めた発達に心配のある（特に知的障害のある）就学前の子どもの発達支援と困難を抱えた家族の支援をする通園施設「むぎのこ」、以来37年間、試行錯誤の実践を繰り返し、社会福祉法人麦の子会として成人部門・社会的養護部門・地域支援部門と事業を拡大し、現在では566人の職員を抱え、856人の子どもと関わっています。そのユニークな支援について、麦の子会の総合施設長でありむぎのこの園長である北川聡子先生にお話を伺いました。

（データや日付は2020年10月当時です。）

家族が子どもをかわいがることが社会と繋がっていくこと

――今年は前代未聞の新型コロナウイルス感染症によるコロナ禍がありましたが、むぎのこではいかがでしたか。北海道、札幌は早くから感染者が出たり、数が多かったりしましたが。

北川　一応いろいろな通達があったりして、対策はしました。それでもお泊り会とか、いつもやっていること、やりたいことをやっているので、多少の違いはあるけれど、いつも通りといえば、いつも通りやっています。

――でも北川園長ご自身は、いつもあちこち飛び回っていらっしゃるので、「STAY札幌」続きでだいぶいつもとは違う日常なんじゃないでしょうか。

北川　そうですね。何かの会や会議に出席するのもリモート（オンライン）で、慣れないうちは不思議な感じでした。それと一番感じたのは、これまでいかに現場を離れていたのかということです。いつ以来か毎日こうやって現場にいられると、子どもや職員のことにいろいろ気づくことがありました。ここはどんな意味があるのか、なぜなのか。例えば障害のある子ってお昼寝がなかなかできないんですが、見ていると職員がうまく寝かしつけているのを見て新たな見をしたり、そういう中で今、そしてこれが何が必要なのか、いろいろと考えることができたのは、自分にとって大きな収穫でした。

――それ、よくわかります。コロナのおかげでというのは変ですが、いろいろ見直したり、これからのことを考える時間がこのタイミングでできたのは、私にとっても大切な機会になっています。そんな中、この度37年間の活動をまとめた本『子育ての村ができた！　発達支援、家族支援、共に生きるために』（2020）を出版されましたが、本ができてどんな感想ですか。

北川　そうですね。今も、お母さんのカウンセリングをしていたんですが、単に障害のある子のお母さんの心のケアというだけじゃなくて、今カウンセリングしたお母さんだったら、代々続く世代間連鎖、ギャンブルだとか、アルコールだとか、暴力だとか、そういう中で育ってきて、むぎのこに辿り着いたみたいな感じで、本来であれば、このお母さんも、そのお母さんの母親も、養護施設や里親のもとで育った方がよかった、そんな方でした。しかし今の日本の公的な制度は、そこまで行き届いていないので、すごく大変な中で育ってきて、生きにくさを抱えて自死する方もいたりとか、そういうことも含めてサポートしているって、あまり公にするものでもありませんが、そういうことの意義みたいなものを感じています。本来むぎのこの社会的な位置づけとしては、障害のある子どもを中心とした養育の場であり、お母さんたちもケアされてみたいなものなんですけれど、いろんなことを必然的にやっているうちに、むぎのこっていったい何なんだろう、やっている自分たちも、何かまとまりがつかないでおりましたが、今回、本を出版させていただいて、気がつけば37年間、こんなに幅広くいろんなことをやってきた、その実践をちょっとトータルに見ることができたというのが、良かったという思いです。

――むぎのこは知的障害のある子を療育する通園施設ということで始まりました。それが、いろんなことをやるようになり、37年間発展し続けてきました。その時その時の時代や社会のニーズに合わせてやってこられたわけですが、どんな思いから進んでこられたのしょうか。

北川　むぎのこに通うことが、障害を軽減するとか治すとか、医療モデルではなく、その子そ

北川聡子（きたがわ・さとこ）――2005年アライアント国際大学・カリフォルニア臨床心理大学院日本校臨床心理学研究科修士課程修了。現在まで子どもの発達支援と家族支援に関わる。社会福祉法人麦の子会常務理事・総合施設長。公認心理師。論文に「発達障がいの子どもを地域で育むソーシャルワーク」（『ソーシャルワーク研究』44（4）　2019）。共著に『子ども家庭福祉における地域包括的・継続的支援の可能性』（福村出版　2020）。

の子が輝く命として素晴らしいんだと考えた時に、やはり家族を支えていかなくてはいけないという思いなんですね。家族が子どもをかわいがる、そこが社会と繋がっていくところだと思うんですけど、その家族の抱える困り感を、はじめは障害の受容というところから入ったり、子育ての困り感というところで入って家族を面接していくと、社会的な貧困の問題だとか、アルコールの問題とか、虐待に至る問題とか、そういういろんなことがあるわけです。だから、そこを何とかしないと、やはり子どもが安心して暮らせるということが第一ということに気がついていくことにならないんです。

西尾和美先生との出会い

——実践を重ねる流れの中で気がついていかれたのだと思いますが、そこに至る大きな転換になったことは何かありますか。

北川　西尾和美先生※に教えていただいた、家族の見方やトラウマですね。それまで全くわからなかったわけですから。トラウマがあり、それが生きることにすごく影響をしているんだとか、そういうことを学び始めたことだったり、西尾先生の勧めで大学院に行って臨床心理を学ぶことで、家族システムの考え方とか、障害のある子どもが幸せになっていくためには、家族を支えていくことで本当に社会と繋がっていくんだということに気づくことができました。あと、アメリカへ行って現地の支援を見聞できたのも大きかったと思います。ギャンブルとかドラッグに依存する人たちに対するアプローチの仕方が、日本だと否定的な感じになるのに、向こうではすごく肯定的なので、温かく家族を包んだ上で子どもを幸せにすることを学べた、カリフォルニア臨床心理大学院での学びは大きかったと思います。そのきっかけをつくってくださったのが、西尾先生でした。

——『子育ての村ができた！』の中にも出てくるんですけれど、20年くらい前、NHKの朝のニュース番組「おはよう日本」で紹介された西尾先生のトラウマケアを見たのが、西尾先生との出会いだそうで、何か運命的なものを感じますが、やはり響くものがありましたか。

北川　子どもってどんなふうに育っていくのかということが、当時常に頭にありました。昔は、ただ良い環境にいれば、ちゃんと大人になって、社会人になってと思っていたんですけど、むぎのこにいると、そうでもないんですね。いろんな課題を抱えてしまって、生きにくさを抱えた子とか、社会人になっても自分に自信のない子とか、社会人になるっていったい何？　みたいな。そういう子どもが育ってどういうことなんだろうという根本的なことを考えながら当時は仕事をしていたと思います。だから、HowToとかも含めて勉強したり、いろいろ勉強してきた中で、いいものを与えれば良くなるとか、そういう発想だけじゃなくて、大人の育ちが子育てに無意識に影響しているというのをうすうす気がつきかけていた時に、「おはよう日本」を見たんですね。その前にも、いろんな子育てのプログラムとか、そういう類のもいっぱい学んだんですけど、それはそれで役には立っていますけど、子どもは育てられたように育つという謎みたいなのが、西尾先生に出会ってわかったというか、そして、それもまた良い方に変えられるということも知りました。

気づきの感性と温かく包む専門性

——昨日は強度行動障害の方に対するコンサルテーションを見学させてもらいました。門外漢の私でもかなり濃い内容なのはわかりましたが、一番感じたのは、学ぶことがたくさんあるということでした。そのためには「気づき」が大事だと思いました。まず気づきがないと、ただのHowToとかテクニックになっちゃうわけで、テクニックに頼っても、1人ひとり特性が違うので、Aさんにはそれが合うかもしれないけど、Bさんには合わないかもしれない。つまり人と関わる根本原理が「気づき」じゃないかと。

北川　その方や、その子どもや家族がどこに困っているんだろうという、そういう気づける視点というのが確かに必要なんですよね。ただそこには、ある程度の専門性は要ると思います。その人の感性もあるけれども、感性プラス専門性が必要です。トラウマと同じで、例えば、アルコール依存症の中で育ったら、どんなふうに子どもに影響するかとか、それから、DVに関しての影響にどういうものがあるかとか、そういうことに対して、ある程度知識がないとやっぱり間違ってしまいます。一般的な考えで対応してしまうリスクは、大学院で学んで気がつきました。障害のある子のお母さんの対応にしても、ある程度一般的なことプラスαだけではやってはいけない領域だなと思ったので、やっぱり知識は支援の力になるというか。あともう1つは、アルコールだとか、ギャンブルだとか、いろんな生きにくさを、本人のせいにしないで温かく包んでいくというか、どうしてそうなったのかという原因や、成り立ちや、どうするかだけわかっていても、そこを温かく包んでいくものがなかったら、昔の母原病みたいになっちゃうので、専門性と温かさというか、気さくさというか、そういうものが必要なんじゃないかといつも思っています。

——その辺りは、むぎのこの保育士さんや職員の方には、どういうふうに伝えていらっしゃるのでしょうか。

北川　やっぱり学んでわかってもらうということになります。毎週月曜日に朝研修というのがあったり、いろんな方面から自閉症のことを学んだり、家族のこと、家族システムを学んだり理解していく、そういう素地をみんなに伝えていくことを大切にしています。特に症例検討などを通して、こういう背景が今に影響している要因かもしれないということに、保育士さんたちも気がついてくれるようになってきています。症例検討は、各クラス月1回やっています。研修とか、症例検討とか、スーパービジョンとか、いろんなことをミックスして職員には伝えたいと思っているんです。

——そういうことは、どこでもやっていることなんですか。

北川　どうでしょう。他園のことよくわかりませんが、私たちは、例えば、昨日のコンサルは強度行動障害の方に対するコンサルで、やっぱり外部の専門家の力に助けを求めて、私たちが気づいていないところを気づかせてもらう、そういう目的でやっています。気づかせてもらったことを、じゃあどうするかというのは、私た

※西尾和美＝1945年岐阜県生まれ。アライアント国際大学名誉教授、同大学カリフォルニア臨床心理大学院日本校創設に尽力。CSPPバークレイ博士号取得。米カリフォルニア州で精神療法家として40年にわたって活躍。トラウマを受けた人たち、機能不全家族の中で育ったアダルト・チルドレン、共依存症の心理療法にあたる。著書多数。2019年死去。北川先生には恩師にあたり、麦の子会として西尾心理臨床研究所を運営することになる。

ちの課題なので。自分たちはよくやったなと思っていても、外部の先生から見たらまだまだできていないというようなところが、本当はその人の現在の力だったり、この人の生きやすさは、もっと質の高い支援をやらないといけないんだなということに気がつくと、チームでやっているので若い先生たちも、また頑張ってやろうという気になってくれるし、ほかのケースでも当てはまるので、やっぱり外部の目というのは、すごく大事だなと思っています。自分たちのやっていることの意味づけを学識経験者の人がしてくれるというか、例えば、ある先生に教えてもらったのは、「むぎこのって、母子で両方、母子臨床という分野よね」とか、親子発達支援相談の場面を見ていただいて、「お母さんを孤独にしないように一生懸命先生方が関わろうとしている、その関わる姿勢がいいですね」と言っていただくと、自分たちはそういうことやっているんだという確信が持てます。外部の人の目で、いい面も悪い面も見ていただくと、すごくやっていることに対する意味づけとか自信にもなるし、方向性も忌憚なく教えてもらえるので助かります。常にやっぱりこれでいいということはないと思うので。

支援される側から支援する側に
——お母さんたちの変化

——やっぱり支援する、関わるということには、学ぶこと、やることがものすごくあるんですね。それをひっくるめての教育だったり、保育だったり。

北川　そうですね。子どもたちを支えるには大人の力が必要なので、うちの場合は、職員もそういうふうに育て育ち合いながら、さらにお母さんたちが育っていくという中で随分力になってくれているというのが大きいと思います。お母さんたちは弱さを抱えてここにくるわけですけど、いろんな悩みとか辛さを否定されることなく吐き出しながら、そのお母さんたちが回復して、元気になっていくということとか、そこで人間関係の繋がりができて、そのお母さんたちが、今度は支える側になってくれるという、（むぎのこが）単なる就職先じゃない支援の連鎖があるんです。それをむぎのこでは「癒された人が癒し人になる」って言っています。

——むぎのこの最大の特徴は、サービス（支援）を受けていたお母さんが、今度は支援する側になって、むぎのこを支えることだと思います。それは、どういう変化なんでしょうか。

北川　うーん。例えば、高校生と面接していると、これが合っているのかな、あれが合っているのかな、これは嫌だよねとか、最初はとりとめのない話から始まって、次に将来どんなふうに生きたらいいかというのを、もうちょっと描きながら面接したりするじゃないですか。あ、この成績だったらこうかなとか、成績に関係ないところで、人間関係をもっと豊かにするんだったらここかなとか。それを彼・彼女に提案しながら、押したり引いたりしながら決めていくのと同じで、お母さんたちと面接しているうちに、だんだんお母さんたちの良さというか、こんなふうにしたら活躍できるんじゃないかみたいなことを感じてきて、お母さんたちからも、実はこれをやりたいという場合もあるし、いろんな関係性の中でそれが組み立てられるというか、作られるというのが、グループカウンセリングだとか、個別カウンセリングだとかを通して、そのお母さんの強みとかが見えてきます。繋がり合う中で、じゃあ、自分も助ける側になろうとなるわけです。むぎのこ発達クリニックの木村先生がうちのお母さんたちの調査研究をしたんです。そしたら、もともと障害児のお母さんは全国的に自尊心が低くなってしまうデータがあるそうです。そこに語り合う仲間がいたりとか、3つぐらいの自尊心を高める要素があって、そのうちの1つが、やっぱり障害児が生まれたら、社会で働けないと思っていたのが、こういうかたちで働く場があるということが、自分を社会に生かしているというところで自尊心を高めているという調査結果を出してくれたので、そういうことにやっぱりお母さんは社会と繋がっているんだなというのが嬉しいですね。

心理との出会い

——むぎのこは、心理支援、特にカウンセリングを支援のベースにしているということですが、心理との出会いはいつでしょうか。

北川　先ほどお話した、西尾和美先生です。

——それまで大学で学んだとか、そういうのはないんですか。

北川　大学は、社会福祉を専攻してました。だから、どちらかというとコミュニティー心理学というか、ソーシャルワーカーの方ですね。ソーシャルワークの方がメインなんですけど、そのソーシャルワークをする上で、やっぱりその背景だとか、人の心だとか、だから、臨床心理も非常に役に立っているというか、その時々で使い分けているという感じです。だから、本当の心理の人に言わせたら、本物じゃないのかもしれないんですけど。あっ、もちろんスーパービジョンは、定期的に受けてますよ（笑）

——心理のどういうところに必要を感じていらっしゃいますか。

北川　やっぱり心理は、相手のことを理解して、共感して、むぎのこにくるお母さんたちはどこかで罪悪感があるので、「あなたはあなたのままでいいんだよ」というところが、私が気をつけている基本です。辛いなと思っていることでも、反対から見れば、とってもいいことなんだよとか、そういうリフレームとかをしながら、本当に「人として存在していいんだよ」というところが、臨床心理の基本なんです。

——心理の可能性は大きいですか。

北川　そうですね。お母さんたちと話していて、いろいろありますけど、でも、どのお母さんにも、やっぱりそこまで生き抜いてきたということに対するリスペクトを持って接することを大切にしています。

家族支援の大切さ

——むぎのこは、常に子どもファースト、それから、家族支援をすごく大切にされていますが、なぜ子どもの支援をしていくのに家族というのが大切になってくるのでしょうか。

北川　子どもが育つためには、家族が原点ですよね。家族の中で安心感を調節していくわけだから、やっぱり家族が子どもに安心感を与えられるような環境にどういうふうにしたらなれるかというのは大きいと思います。子どもにとっては掛け替えのない場所、一番小さな自分の居場所が家族なので、家族が子どもにとっても、自分たちにとっても、居心地のいい場所です。でも家族が一番問題になることもあります。機能不全家族という言葉があるくらいだから、家族で問題が起こります。人間は完璧じゃないから、家族で問題が起きるんですよね。家族だけでいると、どうしても、世代間連鎖じゃないけど、様々な問題は起きると思うんです。そこに少しでも社会の風を入れて支えていくというのが、新しい時代の支援であり新しい家族・社会なんじゃないかなと思います。

——1983年にむぎのこがスタートしてから今日まで見てきて、子どもや家族の変化を感じますか。

北川　子どもの生きにくさは、昔と比べるとやっぱりありますね。社会的に一般的に言われる核家族の問題だとか、子育て力が弱くなってきて、それが子どもに影響してきていたり、自尊心の低い子どもがすごく多いと日本は言われて

います。子育て力の低下とも言えますが、一番は、繋がる力が弱くなってきているのかもしれません。人と人とが繋がるということに対する、何か、信頼感、繋がっていいのかなみたいな、どこまで人を信じていいんだろうみたいなところはありますね。

——まわりも無関心、どこか突き放しているような感じでしょうか。

北川　そうですね。今朝カウンセリングしたお母さんの話でも、突き放されて高校中退して風俗へ行って、もう大変で家出して、それで、彼氏の家に行ったら、ギャンブル家庭だったとか。突き放された子どもは、そういうふうに生きるしかないし、それが社会だって今まで言われてきたんだと思うんです。それでも生きてこられただろうみたいな。でも、それはやっぱり社会の不備じゃないでしょうか。そういう子どもたちに対して本当は大人が何かやらなくちゃいけないんだと思います。

——気がついたらいつの間にか人間関係が希薄な社会になっている。

北川　それはあると思います。今の社会は競争主義で、自分さえ良ければいい。個人主義というのか。ただ、1人ひとりはやっぱり理解してほしいというか、関わっていけば関わっていくほど、理解してほしいと思っているんだなって思います。あともう1つ、海外へ行って思うのは、自己選択をすごく大事にするけど、自己責任ということと一対（イコール）なんですよね。日本は自分の自由にしたい意思と自己責任とはまた別だからみたいな。だから、何かその辺が、まだ成熟していないんじゃないかなと思います。赤ちゃんのころから、大人になっていくってどういうことなのか、社会で生きるってどういうことなのか、どうやったら健全な育ちに少しでもなっていくのかということを日本の英知を集めて考え子育てに生かす時代になっていると思います。むぎのこは、それを常に追い求めています。つまり幸せって何？　どうしたら大人になっていけるのか、社会に着地できるのかという感じです。むぎのこのモットーは、1人の人間として尊ばれていく、障害があってもなくても。同時にたとえ障害があっても、人を傷つけるような生き方をしちゃいけないということです。その意味でむぎのこ育ちの子は弱さはあってもトラウマが少なく、やっぱり人を信頼しています。そして何か自信があります。その子の能力や特性云々じゃなくて、どこか。今、20歳を過ぎているむぎのこで育った子たちを見ていると本当にそう思います。

インクルーシブな子育ての村

——海外の、例えば、アメリカのボーイズタウンやフィンランドのネウボラなどの子育て支援モデルが何年も前から日本にも紹介されているわけですから、日本だって進みそう気がするのですが、紹介されているわりには浸透していないような気がします。

北川　ネウボラって自治体など比較的小さい単位にありますね。だから、ある意味、こんな大都市でやろうとしても難しい。人との繋がりが、あまりにも希薄すぎてというか、だから、やっぱりネウボラもボーイズタウンも、ある程度の村と言ったら変ですけど、人が育つというのは、村ぐらいの共同体で、そこで相談し合ったりすることが大事だなと思います。それがどういう村で、どういう仕組みがあったらいいのかというのは、やっぱり行政だったり、政治だったりの仕事なのかなと思います。

——その村にはまず何が必要なんでしょうか。

北川　何かあったら、相談できること。それには、やっぱり気さくに相談できたり、助け合ったり、お掃除できない人がいたら、できる人でお掃除したり、そして大切なことは、できる、できないで裁かないということです。だって、みんな認知症になったらできなくなるんだし。だから、その村には、病気、精神疾患の人もいていいし、ちょっとわがままな人や、ちょっと変わった人もいるというのが村なんじゃないかって。村をつくり上げる人ばっかりじゃなくて、反対する人もいてもいい。ただ、村の組織としては、やっぱり子どもを育てられるような安全・安心と、いい意味での父性的な枠組みもあるような組織というか、共同体は必要だと思いますけど。

——北川園長の中で、村の理想像みたいなものはありますか。

北川　いや、ないですね。だから、コンサルテーション、ケースカンファレンスや研修会などで繰り返し学ぶんです。また、いろんな違う村からいろんな人が入ってくるでしょう。問題を抱えたお母さんじゃないけど、そういう人がいたら、小さい村で信頼関係を築きながらやってきて、ああ、少し落ち着いたわねなんて言っても、全然人を信頼しないわがままな人が入ってきたら、昨日までのパワーバランスが崩れる。そしたら、また新たな戦略を考えて子どもを育てなきゃいけない。閉じていないから、常に地域のいろんな問題、つまり社会の問題が入ってくるから、それをどうやったらいい方に解決できるかなって常に思っているので、落ち着くことはないと言ったら変ですが、それが村で共に生きていくということだと思います。あえて言うなら、12月30日にみんなで集まってグループホームや料理を作るのが苦手な家庭なども含めてそれぞれにわかれて一品ずつ作り、それを最後に合わせて60家族分のおせち料理を作るんです。共に食事を作ったり、時々どこかの家で共にごはんを食べる。それが村のイメージかしら。

——自然に、あるがままの　　ンな村ということですね。

北川　その中心になる職　　のたびに試されるというか、そうやって力を付けていく。そうやって次の代の人たちに支援のバトンを繋いでいくんです。

——次の代という話が出たんですけど、もっとこういう力を付けるようにしたいとか、こういうことをやっていきたいとか、むぎのこの展望についてどのようにお考えですか。

北川　今は、本当にいろんなお母さんの話を聞いて、やっぱり知らないところでいっぱい困っている人がたくさんいるということを実感しています。お母さん自身の安定が大切なので、困っている人たちがたくさん相談してケアができるような、西尾先生が残してくれた思いを実現するようなカウンセリングルームを作っていかなくちゃいけないのかなと思っているんです。あともう1つは、子どもを育てるにあたっては、やっぱり妊娠期からのサポートが大切なので、妊娠期からのサポートもできればいいなと思います。特に社会的養護の子どもが妊娠したケースなど、喫緊の課題を感じています。その辺りは保健センターと一緒にもう少し早くからお母さんのサポートができたらいいんじゃないかなと思っています。

——これからやっていくべきことがまだまだありそうですね。

北川　ありますよ。この間、産後1カ月、特に21日が大事という話を聞きました。何が大事かというと、赤ちゃんが生まれて、放っておいたら死ぬわけですよね。死なせないようにするために、ミルクやおっぱいをあげ、おむつを取り替えたり、抱っこしたり、あやしたり、常に安心感を与えるというか、それは、生物学的な飢餓から救うというだけじゃなくて、安心感を与

える人がいるんだということを24時間、365日、生後0歳の1カ月（21日）の時に、安心感の調節を赤ちゃんにすることが必要だということです。生後1カ月って、本当にすごい。母親も、まだ体も回復していない、産後うつにもなりやすい時期に、赤ちゃんが安心感のベースを獲得していくんだというようなこととかを、もっともっと世の中に知らせるべきだと思うんですね。人としての大事な基本的信頼を、それで命が助かるわけですよね。命が助かるというのは、ミルクをあげて助かるんじゃなくて、おむつを取り替え、お風呂に入れて助かるだけじゃなくて、将来にわたって命が助かるというか、人を信頼するベース（愛着）、安心感の調節を、0歳児は自分で嬉しいとは言わない時期だけれども、とても大切な時期なので。だから、そういうことをもっと伝えていかなければいけないと思います。

——それをこれからやっていこうと。

北川　そう。伝えていきたいです。それだけ産前産後というのは、大事じゃないかなと。厚労省も、今、そういうことをすごく理解しようとしているので、そのためには、やっぱり関係者が連携して英知を結集していくしかないですよね。

——今できることと、今からでもやることはあるということですね。

北川　朝カウンセリングしたお母さんも、何にもわからなかったって、ご飯も毎日食べていない、食べられないような状況が続いていても、誰に助けを求めていいのかわからなかったと言っていました。つまり、世間にそのことを言いたくないっていう人もいる、だから、まだまだ困っている子どもはいるんじゃないかなと思います。

——そういうのは、どうしていけばいいんでしょうか。自分から声を上げられる人、助けを求められる人はいいですが、言えない人がいる。

北川　うちは、児童発達支援センターという枠で親子がきます。常に完璧ではありませんが、うちにきた親子がこういうかたちでケアされる。また児童相談所からくる子どももいます。だけど、一般的には、保育園などを使っている人が多いから、やっぱり保育園には、専門性の高い心理士さんがいて早くから子どもを見れば、その家族の困り感も見えてくると思うので、「あのお母さんこうよね」とか、「あの家庭、変よね」という見方ではなくて、温かさで包みながら、「こんなふうにしたらいいわよ」とか、「こういうところあるわよ」とか、お母さんの不安に寄り添える、そこは心理職の専門だと思います。寄り添ってお母さんと話して、そして、いい支援に繋げられるようなことをやれたらいい。これからは、スクールカウンセラーのように2つの保育園に掛け持ちの心理士さんがいてもいいんじゃないかなと思います。

——保育臨床ですね。

北川　保育園がそうなっていくということは、日本全体が良くなっていくと思います。将来の子どものために、人を育てるというか、できればそうなってほしいなと思います。まだまだですが。

これからの子ども・子育て支援における心理職の役割

——心理職の話が出ましたが、これからの心理職、心理士の可能性みたいなのはどう感じていらっしゃいますか。メッセージでも構いません。

北川　子育て支援の場で心理職がもっと活躍することが絶対必要だと思います。子どもに対しても、お母さんに対しても、お父さんに対しても、そして社会に対しても。

——でも、心理職って頼まれるから入っていく職種で、心理職の方から声を上げていって、世の中をこう変えていきましょうとは、なかなかならないのではないでしょうか。

北川　うちも最初、そうだったんですよ。むぎのこのお母さんたちって、クリニックと違って、カウンセリングを受けたいってきてるわけじゃないんですよ。だから反対にカウンセリングできる仕組みにしちゃったんですよ。グループカウンセリングも普通にあって、自助など個別に応じたいろんなメニューがあります。さらに、厚労省に事業所内相談支援というかたちで加算が付くようお願いしました。そうすると、これは制度になるから、毎月、学校でいうところの個別懇談のようなものです。それを普通にやる。そうなるとお母さんたちきますよね。そしたら話ができるので。「こういうこと、普通なのよ」っていうふうにしたかったんです。

——アメリカのように心理相談（カウンセリング）が生活の身近にあるという感じですか。

北川　日本人って恥ずかしがり屋だから、心理職の相談は、保育園全員が受けるみたいな、年に2回は受けるのよ、というふうになったらいいですね。できない親も絶対に出てくるとは思うけど、それでも、「相談したり助けを求めるこは、普通のことなのよ」って。

——なるほど。前世紀の保育園は、子どもを預かるところという認識が、社会や時代のニーズに応じて変わっていく。

北川　そうそう。私たちの子育て時代の保育所って、子どもを育てる場所だった。子どもが悪いのは、あの親がこうだからこうなのよって、レッテルを貼るというか、本当の意味で親に優しくなかったかもしれません。おむつ忘れたとか言っても、きちんとしていないからよとか。そういう時代は、もう過ぎ去ってほしいんです。やっぱり親を温かく包む。それこそ、最新の知見を取り入れながら、寝る時間はこういう理由で早い方がいいのよとか、そういうことを知らないでやっているお母さんもいると思うので、そういう知識を教えてあげる機会とか。知らないから間違った子育てをしちゃう。それで、駄目な親だっていうふうに結構レッテルを貼っていたんですよ、昔は。それはもう良くないことですよというのは、やっぱり強く言いたいですね。子育て機関が親を理解し優しく包み、お母さんが子どもを優しく子どもを包んでいくイメージです。

——やっぱり子育てって、絶対の正解はないし、子育てのプロはいませんから。困っていていい。そこに寄り添う心理職など専門家や地域の人など普通の大人もいて、みんなで支え合う子育て。

北川　正解はないし、プロはいないんだけど、でも、日本の英知を集めないといけないと思います。少なくても不健全な子育ては、子どもの困り感が高くなりますから。そういう意味で心理職の役割はこれから大事ですよ。ただ、昔の心理職みたいに、セラピー室から出てこないなんてないように。これからの心理士は、困っている人にこちらから出会う「歩く心理士」が求められているかもしれません。

——それが、「歩く福祉」北川園長からのメッセージですね。ありがとうございました。

（2020年10月3日@むぎのこ）

取材・編集部　宮下基幸